

## 遠山啓さんのこと

吉本隆明



遠山啓さんが突然亡くなった。いま記憶のなかから西日の落ちかかった階段教室で、重たいゆっくりした口調で「量子論の数学的基礎」の講義をすすめている遠山啓さんの姿を思い浮べる。現在まで何べんその情景を思い浮べただろう。生涯のうちに变形したり細部にこだわったりしながら繰返し

想像的に再現する重大な情景があるとしたら、わたしにとっていつでも取り出されてくる数少ない情景のひとつである。あれは敗戦の余燼がまだ冷めない時期のことであった。

遠山さんは詰め襟の国民服を黒か紺に染めたような粗末な服を着ていた。講義の内容は量子化された物質粒子の挙動を描写するために必要な数学的背景と概念をはっきり与えようとするものであった。わたしははじめて集合・群・環・体・ヒルベルト空間・演算子などの概念に接して、びっくりしていた。そしてむさぼるように講義を吸収しつづけた。敗戦に打ちめされた怠惰で虚無的な学生のわたしが、一度も欠かさずに最後まで聴講したたったひとつの講義であった。怠惰なくせに職人的な教授たちを馬鹿にしきったひとりの学生を何が惹きつけたのだろう。つぎつぎに繰りひろげられる抽象的な代数概念が、いままで思い込んでいた数学とまったく異っていた驚異ももちろんあった。また薄い膜をつぎつぎに剝いでゆくように、それまで難解におもわれた化学結合の量子論的な扱いが、軽く容易なものにおもわれてくる興奮もあった。けれど、もっと大きいのは遠山さんの淡々とした口調の背後に感得されるひとつの〈精神の匂い〉のようなものの魅惑であった。ほかは空洞のように静かになった学校のその西日のあたる教場で、ああ、これが学問ということなのだ、とはじめて感じていた。わたしは怠惰でとうてい駄目だが、わたしに〈学問〉を学校の講義で感じさせたのは遠山さんがただ一人であった。

遠山さんの〈精神の匂い〉は、ひとくちに言えば大学の教授の一般的なタイプである、頭のいい坊ちゃんという印象とまったく異ったところからきていた。人間の本性にある怠惰とデカダンスをよく知っていて、それを禁欲的な強い意志で制御した上に数学を築いているという風に理解された。このような〈精神の匂い〉は、怠惰と虚無に沈み込んでいたわたしにはすぐに

嗅ぎわけられるようにおもわれた。なぜそう感  
じられたのかと改めて問うてみると、あまり確  
かな手がかりはみつけれない。講義の内容は切れ  
味の軽快さよりも抜群の重味を、整合性よりも構  
想力の強さを背後に感じさせるようなものであり、  
このような印象は、あるひとつの対象を理解す



るために不必要なほどの迂回路をとって到達  
した証拠であるように思われた。もっと別の言葉  
でいえば対象を否定し嫌悪したものがその対象に  
むかって独力で到達したときのもどかしさと力強  
さとのふたつが結びついていた。

わたしの精神状態は最悪であった。富山県魚津の

動員さきの工場で敗戦にあうと、建設していた中間装置を壊し、書類を焼きはらって、どういう混乱になっているのか、何  
が起ろうとしているのかまるでわからない東京へ舞いもどった。そしてすぐに母親の疎開先である福島県須賀川の農家に引  
込んでしまった。母親といっしょに畠仕事をして過しながら、東京でおこる出来ごとによってはここに居ついて生活の糧を  
得ることになるかもしれないと考えていた。

国家ははたして敗戦後も存続しうるのか。大学なるものは存立が許されるものなのか。本土内での抗戦は起りうるのか。は  
たして人々はどうやって生存と生活の手段を獲得したらよいのか。こういうことの一切が未経験で不明であり、一切の指示  
がどこからも与えられなかった時期が、いま存在していた。敵密に言えばそれは敗戦後の数か月であったかも知れないが、  
たしかに国家が権力を喪失した混沌の時期が存在していた。わたしは母親と土地の農家から借りたわずかばかりの畠を耕や  
しながら、何が起るか分からないその何かを、ただじっと待っていたとおもう。またどこから来るかわからない確かな指示  
を、それが何であれ望んでいた。けれどわたしが何度でも確認したいとおもうのは、この無権力的な混乱の時期に、わたし  
たちは何かを起すことも何かの指示を受け取ることもなかったということである。つまりは左右を問わずすべてどんな勢力  
も諸個人も、何の構想力も力ももっていなかった。このことは無条件降伏であったか否かという法制上の論議の以前に、は  
っきりさせておかななくてはならない。また誰がどう弁解しようと無権力の、いいかえればどんな勢力や諸個人が何をしても  
いい真空状態は確実にあったにもかかわらず、どんな勢力も諸個人もその可能性を〈視る〉ことも、また空洞を〈発見〉するこ  
とさえもできなかったのである。

みじめなことにわたしは殻にこもった蝸牛のよ  
うな疎開先の農家の生活から徐々に頭をだして、  
東京がどうなっているか、学校がどうなってゆく  
のかを確かめてくると言いのこして上京した。

大学はもっと酸鼻をきわめていた。無気力でうや  
むやのうちにずるずると再開されようとしていた



のである。はしゃいでいるのはとんだ一夜漬けの  
馬鹿だけだとわたしにはおもわれた。敗戦とはな  
にか、大学とは何なのか、学問とはいったいな  
かに回答することなしに、大学がまたぞろ再開さ  
れようとする姿が醜悪で、嫌悪だけがどうしよ  
もなく内訌してくすぶっていた。そんなおおきな

ことを言わなくてもいい。すでに動員さきの工場や農村生活で、ある意味では放埒で、ある意味では年齢よりもはるかに生活経験と粗っぽい工場生活を積んでしまったまま、方途を無くした状態で、静かで無気力で惰性的な学業の世界に復帰しようとしても、簡単に精神の切り換えがきくはずがなかったのである。毎日が暗鬱で、何をする気もなかったし、現実の社会状況はただ嫌悪しか誘わなかった。

そんなとき遠山さんは校門の左側にあった掲示板に特別講義「量子論の数学的基礎」の貼り紙を掲げて無償の講義にのりだしたのである。このことは何を意味したかは、偶然その貼り紙を眼にしたわたしの精神状態には明瞭であった。わたしにも主題に対するいくらかの知的な渴望が残っていたことは確かだったが、そんなことは大した問題ではなかった。敗戦とはなにか、大学とはなにか、そして〈学問〉とはいったいなにかについて確乎とした構想をもち、それを公開するだけの気力と蓄積とをこの学校の小使さんのような詰め襟すがたの壮年の教師が内包していることを意味していた。そしてもっと潜在的な領域にまで拡大すれば、無権力の混沌とした敗戦期に、ただひとり何をなすべきかをじぶんの事実世界の場所から心得ている人間がいることを意味したのである。わたしは怠惰で虚無状態の学生だったが、すぐにこのことを理解できたとおもう。数学上の業績に限定すれば、遠山さんよりも優れた業績をあげた同時代の代数関数論の学者はいるかも知れない。けれど総合的な構想力と洞察力と識見を包括して遠山さんに匹敵する数学者は存在するはずがなかった。むしろそれだけの思想家が存在するはずがなかったといっても誇張ではない。領域の特殊性からみて数学と音楽の世界には天才的な職人が存在できる余地がある。わが国の数学者と音楽家の優れたものはほとんどこれにちかいかいといって過言ではない。だが遠山さんはまったく

その対称に位置するものであった。数学のよう、な純粹理念の学を研究するにも、なお怠惰のデカダンスや迂回路や落ちこぼれの純粹体験が有効であることを身をもって立証している唯一の数学者だったろう。わたしが数学者としての遠山さんに付きあったのは「拡張された因子および因子類」



の発表を聴きにいったのが最後であった。時間が超過しても時計台の時計を会場の窓のそとにちらっと視やり、悠然として何かつぶやいて思わず会場の哄笑を誘った遠山さんの姿をいまでも眼に浮べることができる。

わたしはすぐに遠山さんの講義にとびついた。そしてむさぼるようにして知的な飢えを充たしていった。いま考えるとその講義をつうじて遠山さんから無言のうちにうけとった〈学問〉の概念は、けっして新しいものではなかった。わたしは旧きよき時代のドイツかどこかの大学では、騒然たる社会情勢の下でも驚天動地の戦乱のなかでも、このように寂かにそして潜熱のように〈学問〉が授受されたのだろう、というようなことをよく空想した。物心ついてから、がさつな生活と戦争と敗戦の荒廃しか知らず、およそ教養の匂いなどひとかけらももっていないわたしには、この講義がつくりあげている稀にみる稠密な潜熱のような雰囲気は貴重なもののおもわれた。

遠山さんは後年、大学紛争のあとでその頃を回想している。

そのことについて私に一つの思い出がある。8月15日から9月、10月にかけて、工場動員にでていた学生たちがぼつぼつ大学にもどってきた。しかし、大学は荒涼としていて、なにもない。塔の上の大時計は12時をさしたまま何年間も動かなかった。学生たちは、あの時計はいつも正午で、いつも空腹だということを象徴していると言って笑った。

そういうときのこと、数人の学生がやってきて、なんでもいいから講義してくれという。ぼくたちは大学にはいったが、工場動員の連続で、ロクな教育を受けていない、だから、講義というものに飢えているのだ、という。

私は運よく戦災にもあわず、比較的余裕もあったので、学生の希望におうじて講義をはじめることにした。今日という自主講座だから、単位などというものはいっさいなしである。それでも毎回200名ちかくの学生がききにきた。こちらもしげ

んと熱がこもって、3時間か4時間ぐらいぶっ／つづけに講義した。

率直にいうと、長い教師生活のなかで、そのときほど熱をこめて講義したことはなかったような気がする。講義をきくほうも、するほうもなにかに利用しようという目的もなく、まったく無償の行



為だったからであろう。—「卒業証書のない大学」

もちろんわたしは遠山さんに講義をしてくれと依頼にいった学生ではない。そんな殊勝な心がけなどすでにひとかけらも持ちあわせないどん底の落ちこぼれであった。だからこそこの講義に衝撃を

うけたのだとも言える。遠山さんには敗戦の打撃から起きあがれない若い学生たちの荒廃をどこかで支えなければという使命感が秘められていて、その情感と世相への批判が潜熱のように伝わってきた。それを理解することが数学上の概念を理解することと同一であった。わたしは怠惰と無垢と不信をあためてすべてを白眼視していたから、遠山さんと直接に出会えるはずがなかった。けれど心は決定的な衝撃をこの講義からうけとっていた。むしろ敗戦のあとにもう一度生きてみようかという微光のようなものを遠山さんの講義からうけとっていた。

このうけとり方は遠山さんの潜熱のような教育上の使命感の埒外にあるものだったろう。わたしは、ひとはひとに影響を与えることも影響をうけることもできない、という太宰治の言葉が好きだ。この言葉はひとはひとに教えることもひとから教えられることもできない、ということをも意味している。遠山さんはわたしに教えたのではなかった。だからわたしは教えられたのだ。遠山さんはわたしに教えた。だからわたしはそのことを教えられなかった。多くの学生たちのあいだには教授はただ敬遠すべき偽善者たちであり、大学は諸悪の根源であり、ただ通過すればいいと考えている怠惰でひねこびた箸にも棒にもかからない暗鬱な存在がきつといる。かれらに取柄があるとすれば、ただ無垢で無償でありたいという願望だけだ。わたしはそんな学生のひとりであった。遠山さんの教育理念と情熱をもってしても、このような存在は落ちこぼれるほかないにちがいない。だがわたしの信じているところではこのような存在の地平を解明するところに膨大な未知数の課題が開かれているはずであった。

少くともわたしに対して遠山さんは、理念が落ちこぼしたものを最終的には人格で拾いあげていた。後にわたしがあらゆる

職から断たれて途方にくれていたとき、アルバノイトの就職口を探してくれた。わたしはお蔭で長いあいだ生活の破産を免れることができた。

わたしのイメージのなかで生成している晩年の遠山さんは、新たな視点から数学基礎論の建設に向おうとしているようにおもわれた。数学基礎論と



いうことで遠山さんが考えていたのは、〈構造〉の概念を駆使して数や図形の集合の意識学をつくりあげることであつたようにおもえる。点・線・面などの概念をもとに作りあげられた図形の概念が、純粋な意味では実在の物体とは何のかかわりもなく成立する〈理念〉の概念であるにもかかわらず、その図形の学である幾何学が自然や事実の世界における物体の運動にたいして純粋な記述でありうるのはなぜか、そのことは意識にとってきわめて重要なある段階を意味するという発見から着想して、フッサールが意識の幾何学ともいべき純粋現象学を建設していったとすれば、遠山さんはたぶん数と図形の集合の意識学ともいべきものを構造的な同型の概念をもとにして基礎づけようと考えていた。遠山さんの名著『代数的構造』のなかでその萌芽ともみられる記述がみつけられる。ある数とか図形とか事実の概念とかの集合があつて、その集合が任意の〈理念〉によって関係づけられているならば、それは〈構造〉と呼ぶことができる。そしてこのばあいに〈理念〉なるものが問題となる。フッサールは純粋現象学を構成するにさいして、たとえば三角形が大小や形態のちがいにいかかわらず、誰によつても同一の直観像を形成しうるのはなぜかという問いから発して、このように誰によつても実在の物体や知覚の相違にいかかわらず誤解の余地なく同一のものと認知されうるような対象概念を〈理念〉のひとつの態様とかがえた。そして〈理念〉を構成しうる与件としての純粋意識と志向性と対象性の構造の概念のうえに、意識の理念の学である現象学をつくりあげていった。いま、数学的な集合を関係づける〈理念〉もまた、現象学における〈理念〉とおなじように意識のある相関性であることがたぶんきわめて重要な意味をもっている。遠山さんは数学的な〈構造〉がたんに恣意的でないための条件として、その構造が実在の世界にたいして内在する普遍性をもっていなければならないこと、さらにその〈構造〉ができるかぎり〈美しく〉なければならないことを挙げている。そしてこのばあい〈美しく〉ということは、群のような単純で明瞭な姿をもつものを意味している。なにが問題なのだろうか。数学的な〈構造〉の与件となる〈理念〉は、意識の相関性であるかぎり無限の自由度をもっている。けれど他方では〈理念〉であるかぎりにおい

て、無限にある度合の普遍性を融解して高次のノ普遍性にゆくに相違ないことである。ここに数学基礎論のもっとも重要な課題が潜んでいるように見える。数学者たちはつぎつぎに〈構造〉を融解して新たな構造をつくりだしてゆくにちがいない。だがかれらはじぶんたちが何をしているのかを内とを結びなおさなければならない。



省し基礎づけることはありえない。ここで内省とか基礎づけとかいうのは、数学者たちがひとりで行っている フッサールのいわゆる(einklammern)を解除してみせることに該当している。その内省を介して数や図形の集合の意識学ともいうべきものが〈構造〉の無限の上昇と事実や自然の世界

遠山さんのもっていた哲学と文学の素地は、おのずからその方向をさしているようにおもわれた。あの徒勞にも似た強靱な数学教育の方式の創設と実行の背後にあって遠山さんをささえたのは基礎論の研鑽と整序された構想であったろう。わたしたちは数学と哲学のその融合の姿をみる日をもうもつことができなくなってしまった。

—よしもと たかあき…詩人・批評家

(編集者注—この論稿は、文芸雑誌『詩』1979年11月特別号〈中央公論社〉に書かれたものを、転載させていただきました。)